けていたのに、お殿様が出来てこのかたここらが国境だろうというので、小川を一応の境としたのですから、小川の水が海にそゝぐこの浜がどちら側のものかに両方の生活がかかっているのです。

それにこのところ長い戦さが続いて、両国の境が小川を越してはるかに南に移ったり、もとにかえったり、更に北に移ったりするのですからこまりものです。

くる日もくる日も、「俺が浜だ。」「いや俺が浜だ。」と争いを繰り返しているうちに、この一帯の里を、だれ云うともなく〝俺が浜〟と云うようになり、いつか〝小良浜〟と呼ぶようになりました。

やがて長いあいだ続いた戦が終りました。相馬のお殿様と、岩城のお殿様が、お互いに国境をはっきりきめようというので小菅が原で会いました。

そして、境川から小良が浜の中間を流れる小川の線を国境ときめ、小良が浜の人達が自由に便利に生活できるようにと、おたがいの里を両国の入会地にきめました。

こうして、相馬小良浜・岩城小良浜の二つの村ができました。